

『ベーオウルフ』のIngwine について

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

101

(発行年 / Year)

2011-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007390>

『ベオウルフ』の Ingwine について

法政大学キャリアデザイン学部教授 岩谷 道夫

1.

古期英語詩 *Beowulf* 『ベオウルフ』には、その中に何箇所か、Ingwine イングウィネという表現が見出される。それは、『ベオウルフ』の前半の舞台となる Dene デネについて、『ベオウルフ』の著者が、デネに与える賛辞の中で、例えば、「イングウィネを御守りになる国王」(1044行)、「賢明なイングウィネの国王」(1319行) というふうに使われている。

『ベオウルフ』は、架空の人物 Beowulf ベオウルフを主人公とした、およそ3000行からなる叙事詩的な物語であるが、その中に現われる国家、民族等は、おおむね実際に存在していたものと考えられる。例えば、ベオウルフの故国 Geatas イェーアタスは、紀元6世紀ごろまでスカンジナビアに実在していたと考えられる国家であり、ベオウルフに怪獣グレンデルを倒すことを依頼したイェーアタスの友邦国 Dene デネは、今日のデンマークである。また、北ヨーロッパにあって、しばしばデネおよびイェーアタスと対立していた諸国、具体的には、Francan フランカンがフランク王国で、Hugas フーガスはフランク王国の一部として知られており、Fresan フレーザンは、今日のオランダのフリースラントの起源のフリージア王国で、Sweon スウェーオンは今日のスウェーデンである。それらはすべて、歴史的に実在していたことが明らかな国家、民族である。また、『ベオウルフ』には、フランカンについての言及の中で、Merewioing メレウィオイングという表現が見出され(2921行)、フランク王国のメロヴィング王朝の国王を表わす言葉として用いられてい

る。そして、そのような歴史的名辞の一つとして、Ingwine イングウィネという表現が存在し、前述のように、デネを称える表現となっている。

ところで、ローマ帝国時代、タキトゥス、プリニウス、そしてストラボン等によって用いられていた、Ingaevones インガエウォネースという名辞があった。その Ingaevones は、ローマ時代、北海沿岸のゲルマン人諸部族の総称であった。『ベオウルフ』の Ingwine と近似した内容を持つ可能性があるかと推測されるような名辞である。

本稿では『ベオウルフ』の Ingwine という表現が、ローマの歴史家によって用いられていた Ingaevones という表現とどのような関係を持っているか、また『ベオウルフ』において、なぜデネが Ingwine という表現で賛辞を与えられているのか、について考えることにしたい。なお、本稿では『ベオウルフ』のテキストは、すべてクレーバー編の刊本を用いた⁽¹⁾。

2.

まず、古代ローマで言及されていた Ingaevones についてであるが、タキトゥスは、『ゲルマーニア』の中で、次のように記している⁽²⁾。

…大洋に最も近いものが、インガエウォネース、中央部分にいたのがヘルミノネース、その他のものがイスタエウォネースと呼ばれている…。

上の記述は、ゲルマン人の伝承で、自らの神と、その子である人間の始祖から三人の男子が生まれたという言及がなされた後、その三人の子にちなんで命名された部族集団について述べられた部分である。大洋というのは、その前後の記述により、北海のことと思われる。つまり、北海に一番近いゲルマン人部族集団が、Ingaevones インガエウォネースということになる。インガエウォネースは、北海沿岸のゲルマン人諸部族の総称であり、タキトゥスは、北海沿岸の近くのゲルマン人部族について、あらためて別の箇所具体的に述べている⁽³⁾。そこでは様々な部族名が列挙され、例えば、フリースイー（フリージアン）、カウキー、キンブリー、等と続き、その次に、スエービーという部族名が記されている。そして次に、スエービーに属する部族名が述べられている。

セムノーネース、ランゴバルディーとネルトス諸族と総称される諸部族、すなわち、レウディーグニー、アウィオーネース、アングリイー（アングル）、ワリーニー、エウドセース（ジュート）、スアリーネース、ヌイトーネースである。タキトゥスによれば、ネルトス諸族というのはネルトスという女神を信仰しているという共通項を持つ諸部族であった。また、タキトゥスは触れていないが、インガエウォネースという名称は、もともと Ing という神を信仰するゲルマン人諸部族という意味を持っていた⁽⁴⁾。それが、北海沿岸のゲルマン人諸部族という意味を持つようになったのは、その信仰を持つゲルマン人諸部族の居住地が、北海沿岸であったからである。

タキトゥスの少し後にゲルマン人について詳しい記述を残しているプトレマイオスは、タキトゥスとは異なり、インガエウォネース、ヘルミノーネース、イスタエウォネースという三つの部族集団の分類は行っていない。しかし、北海の沿岸に居住している部族として、フリースイー（フリージアン）、小カウキー、大カウキー、サクソネース（サクソン）、エウドセース（ジュート）、キンブリー等に言及している⁽⁵⁾。興味深いのは、タキトゥスで北海沿岸の諸部族として言及されている部族が、内陸の部族として記されている点である。例えば、アングリイー（アングル）、ランゴバルディー、セムノーネースである⁽⁶⁾。タキトゥスにおいて北海ゲルマン諸部族のインガエウォネースに属することになっているアングリイーが、プトレマイオスにおいては、内陸の部族と記されているので、後にブリテン島に移住してアングロ・サクソン民族を形成することになるアングリイーは、そのどちらであったかという問題があり、筆者は以前その問題を追究したことがある⁽⁷⁾。本稿のテーマとは直接関係を持たないので、ここでは触れないが、アングリイーが歴史上のある時期に、タキトゥスに言及されている北海沿岸の居住地から、一部が内陸に移住した可能性があるという事だけは付記しておきたい。プトレマイオスに言及されているアングリイーは、その移住したアングリイーについての記述であるものと推測され、従って、タキトゥスもプトレマイオスも、いずれもアングリイーについての記述は部分的に正しかったものと思われる。

一方、タキトゥスより少し前の時代のプリニウス（大プリニウス）は、ゲルマン人が次の5つの部族群、すなわち、ワンディリイー、インガエウォネー

88 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

ス、ヘルミノーネース、イスタエウォネース、ペウキーニーに分かれるとし、インガエウォネースにカウキー、キンプリー、テウトニーが属するとしている⁽⁸⁾。

タキトゥスに戻れば、三つの部族群、インガエウォネース、ヘルミノーネース、イスタエウォネースの他に、マルスィー、ガンブリウィイー、スエービー、ワンディリイーという、新たな部族群の名称を記述している⁽⁹⁾。タキトゥスにおいては、前の三つの部族群と、次の四つの部族群の関係が必ずしも明らかではない。例えば、インガエウォネースの中にスエービーが含まれているように記述されているので、後の四つの部族群は、前の三つの部族群の下位区分に属しているように思われるが、一方、後の四つの中の一つ、ワンディリイーは、古いスカンジナビアのゲルマン諸族の総称であり、その中に、ワンディリイー、ゴトーネース、ランゴバルディー、ブルグンディーが含まれ、前の三つの部族群と同等の部族群と考えられるからである。プリニウスの分類では、ワンディリイーは、インガエウォネース、ヘルミノーネース、イスタエウォネース、と並列されていて、おそらく古い時期には、プリニウスの分類のように、ワンディリイーは、インガエウォネースと同じような大部族群だったものと推測される。その後、スカンジナビアのゲルマン人諸部族であったそのワンディリイーの移動があり、大部族としてのワンディリイーが、ワンディリイー、ゴトーネース、ランゴバルディー、ブルグンディー等の個別部族に分かれたため、タキトゥスの分類では、それらの個別部族が、上記の三部族の中に再編されたのであろう。タキトゥスの分類は、ワンディリイーが、スカンジナビアから移動する前後の時期を反映したものと思われ、従って、プリニウスではワンディリイーに属していたランゴバルディーが、タキトゥスでは、スエービーに属するもののよう記述されている。一方、プリニウスで、ワンディリイー、インガエウォネース、ヘルミノーネース、イスタエウォネースとともに言及されているペウキーニーは、タキトゥスも触れてはいるが、タキトゥスの情報の中では、既に重要な部族群としての記述は見出されない。それほど年代が異ならないプリニウスとタキトゥスにおける、情報源の相違によるものであろう。

3.

これまで、ローマのタキトゥス、プリニウス等によって用いられていた *Ingaevones* インガエウォネースという表現の、具体的なゲルマン人諸部族との関連を見て来た。タキトゥス、プリニウスのいずれにおいても、インガエウォネースは、北海沿岸の部族集団であることが明らかである。

『ベーオウルフ』に *Ingwine* という表現が見出されるが、*Ingwine* は、『ベーオウルフ』の作者が、デネこそがイングウィネの代表であると称賛する場合に用いられていた。上記のように、ローマのタキトゥス、プリニウス等の用いた *Ingaevones* は、北海沿岸のゲルマン人と関連を持つ表現であったが、そこには、『ベーオウルフ』に見出されるデネについての言及はなかった。それは、西暦 1～2 世紀においては、デネが北ヨーロッパのゲルマン人としての名称としては、ローマに伝わっていなかったという事実の現われであろう。しかしながら、『ベーオウルフ』の作者が、イングウィネによって、アングロ・サクソンとデネとの共通意識を表わし、デネをイングウィネの代表的存在として称賛している場合、そこにかつて北海沿岸にアングル、サクソン等がいたころのイングウィネを見出していることは想像に難くない。そこから言えることは、古期英語の *Ingwine* がラテン語の *Ingaevones* と同義であり、従って、ローマ時代の *Ingaevones* には、たとえ、タキトゥスやプリニウスに、デネに相当する名辞が見出されないとしても、後に古期英語でデネと呼ばれることになるゲルマン人諸部族が含まれていたということである。

『ベーオウルフ』においては、*Ingwine* という表現は、アングロ・サクソン人とデネが共通意識を持つ集団として捉えられていた。それでは、アングロ・サクソン人である『ベーオウルフ』の著者が、なぜその *Ingwine* という表現を用いて、デネを称賛しようとしたのであろうか。

アングロ・サクソンの古い伝承では、古期英語で書かれた *Runic Poem* に、*Ing* と東デネの関係について言及しているものがあり、それはデネを *Ingwine* の代表として称える記録として考えられるものである⁽¹⁰⁾。つまり、ブリテン島に渡ったアングル、サクソン、ジュート、フリースランといった人々の、ブリテン島に移住後の比較的早い段階で、デネに対する強い共感が示されてい

るのである。それは明らかに、デーン人の侵入以前の事である。

ここで想起されるのは、アングルの故地についての、古期英語で記述された言及である。例えば、9世紀のアルフレッド大王によるオロシウスの古期英語訳には、アングルが、今日のユトランドのシュレースヴィヒに居住していたが、それ以前にはその近くの島に居住していたという言及が見出される⁽¹¹⁾。また、エゼルウェルドの『年代記』、や12世紀のウィリアム・オヴ・マームズベリーにも、関連した記述が見出される⁽¹²⁾。つまり、アングルは、ユトランド半島のシュレースヴィヒを重要な居住地域としていたが、それ以前には、ユトランド半島の近くの島嶼に居住していたというのである。

ここで、『ベオウルフ』の冒頭における伝説的なデネの国王の Scyld シュルドの渡来の記述について考えてみたい。その冒頭の部分は、後にデネの王朝の創始者となったシュルドが、幼い時に船に乗せられて、デネの海岸に漂着した事実に言及している⁽¹³⁾。一方、『アングロ・サクソン年代記』の855年に記述されているウェスト・サクソン王家の系図は、アングロ・サクソンとは無関係な他の国々の人物、英雄等もその中に含まれているが、例えば北欧神話の神である Woden から25代目に、Sceaf シェーフという国王の名前が登場し、そしてその七代後の子孫が Scyld シュルドとなっている⁽¹⁴⁾。『ベオウルフ』の成立時期については、諸説があるが、筆者は10世紀の前半ごろと考えている⁽¹⁵⁾。そうであれば、『ベオウルフ』は、『アングロ・サクソン年代記』の成立の9世紀後半より後代であり、『ベオウルフ』の著者は、『アングロ・サクソン年代記』のウェスト・サクソン王家の系図に影響を受けている可能性があるであろう。船に乗せられてデネに漂着したデネの王朝の創始者 Scyld シュルドは、『ベオウルフ』では Scyld Scefig シュルド・シェーヴィングと記されているが、一般的に Scefig シェーヴィングは、Scyld シュルドの呼び名のようなものであり、シェーヴィングのシュルドという意味であると解されている⁽¹⁶⁾。例えば前述のエゼルウェルドの年代記は10世紀後半の成立であるが、そこでは、Scyld シュルドではなく Scef シェーフが船に乗ってデネの海岸に到着することになっており、また Scef が Scyld の父になっている（エゼルウェルドでは、『ベオウルフ』の Sceaf シェーフが Scef シェーフになっている）。一方、12世紀のウィリアム・オヴ・マームズベリーでも、Sceaf シェー

アフが、船でデネの港に漂着している。Scyld シュルドは、北欧のデンマークの王朝の系図にある国王 Skjold スキョルドと、同一の人物であると考えられているが、しかしながら、重要なのは、Skjold スキョルドには、『ベオウルフ』のような流浪の運命は付与されていないという点である⁽¹⁷⁾。Sceaf シェーフと Syld シュルドの関係については、それ自体大変重要な問題であるので、稿をあらためて論じたいと思うが⁽¹⁸⁾、ここで強調したいのは、『アングロ・サクソン年代記』のウェスト・サクソン王家の系図における Sceaf シェーフと Scyld シュルドが、『ベオウルフ』のデネの国王 Scyld シュルドと密接に関係があり、またその Scyld シュルドはデンマークの王朝の国王 Skjold スキョルドと同一人物であるが、しかしながらデンマークには、Skjold スキョルドについて、流浪の人生は伝えられていないということである。そこから何が帰結するか、確言は避けたいが、少なくとも、Scyld シュルドはデンマーク人の国王であったが、アングロ・サクソン人にとっても祖先の国王であり、そしてその Scyld シュルドの流浪の人生は、アングロ・サクソン人の海を越えたブリテン島への移住の体験と重なるものであるということ是指摘出来よう。つまり『ベオウルフ』の冒頭の部分は、『アングロ・サクソン年代記』のウェスト・サクソン王家の系図をもとに、翻案された物語であろうということである。しかしなぜそのような冒頭の Scyld シュルドの物語が作りだされることになったのであろうか。それも本稿のテーマと密接に関連して来ることになるであろう。

ところで、『ベオウルフ』の冒頭の描写と同じような記述が、10世紀のザクセン人の Widikund von Corbey ウィディクント・フォン・コルベイに見出される⁽¹⁹⁾。ウィディクント・フォン・コルベイによれば、昔サクソンは、ユトランド半島の近くの島に居住していたが、船に乗ってユトランド半島に移住したということになっている。ウィディクント・フォン・コルベイの記述については、明らかな誤りが見出される点もあり、すべてを文字通りの事実とすることはできないが⁽²⁰⁾、サクソンの起源についての移住の伝承は、アングロ・サクソンの伝承とも共通する要素を持っていて興味深い。

サクソンの起源については、以前筆者は言及したことがあったが⁽²¹⁾、サクソンという部族が成立することになる上で、二つのゲルマン人部族が関与した

92 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

と考えられる。一つはカウキーであり、もう一つはレウディーグニーである。カウキーはタキトゥスにおいて特筆されている、ゲルマン人諸部族の中でも屈指の有力部族であるが、一方レウディーグニーは、タキトゥスには言及されてはいるが、アングルと同じように、特に有力というわけではない一つの部族であった。そのレウディーグニーが、サクソンという名称になり、カウキーを併合して、北ドイツの広大な平原を居住地域とするようになったと思われるが、そのサクソンの伝承が前述のウィディクンド・フォン・コルベイの記述に反映されているとすれば、ユトランドまで船に乗ってきたのは、カウキーではなくレウディーグニーであろうと思われる。カウキーは、北は北海沿岸の地域に面して居住していたが、その南の広大な内陸地域にも居住していて、その居住地域は、極めて古い時代に遡るものと思われるからである。

一方、後にユトランド半島に移住したデーン人は、『ウィードシース』や『ベーオウルフ』にも言及されているユトランド半島中部のアングル王国のオッフア王の伝説を、デーン人の王家の伝承に取り入れ、それがサクソ・グラマティクスの記述になって現われているのであるが²²⁾、それは、『アングロ・サクソン年代記』のウェスト・サクソン王家の系図における Scyld シュルドの導入の逆の場合と言えるであろう。それは、他国の英雄を自身の国家の王族としたいという希望だけからなされたとは思われない。デーン人の中に、アングル人との共通意識が感じられるからこそ、オッフア王をデネの国王としたのであろう。

アルフレッドのオロシウスで言及されている、アングルの故地としてのユトランド半島の近くの島嶼とは、今日のデンマークの島々の中のいずれかであると思われ、また、そのような状況は、デーン人の故地が、スカンジナヴィア半島南端であったことも想起させる。恐らくアングルが、ユトランド半島の近くの島嶼からユトランド半島中部のシュレースヴィヒに移住したのと平行して、デーン人は、スカンジナヴィア半島南端から、アングルの居住していた島嶼へと移住したのであろう。古代において、例えばタキトゥスにおいては、アングルを含む北海ゲルマン諸部族とデーン人が、敵対関係にあったという言葉は見出されない。というよりも、タキトゥスにおいては、前にも触れたが、デーン人については言及されていない。北方の有力なゲルマン人として言及されてい

るのは、スウェーオンとゴートである⁽²³⁾。タキトゥスの時代には、すでにゴートは、スカンジナビア半島からバルト海を渡り、ヴァイクセル川の東に居住していた頃である。ゴートの移動したスカンジナビア半島南部の地域には、そこにとどまったゴートの後裔が、後に『ベオウルフ』に現われるイェータスという国家を作っていて、また『ベオウルフ』の舞台となるデネの国家は、スカンジナビア半島南端ではなく、アングルの移住した跡地であるところの、ユトランド半島の近くの島嶼にあった。そしてアングルとデネの間には、後にアングルが、サクソンやジュート等とともにブリテン島に渡った後の、デーン人の侵入の時代に見られるような敵対関係は、存在していなかった。

以上、確認したのは、古来アングロ・サクソン人には、古い古期英語に見られるように、デネをイングウィネの代表と見なすような伝承があり、また『アングロ・サクソン年代記』のウェスト・サクソン王家の系図にも、デネの国王と思われる人物の名前が記され、その伝統は『ベオウルフ』の冒頭のデネの国王 Scyld シュルドの物語にも反映し、後代のエゼルウェルドの年代記、ウィリアム・オヴ・マームズベリーにも、内容の変更はあったが、デネの王朝に対する共感、尊崇の伝統は、受け継がれていったということである。つまり、『ベオウルフ』で言えば、デネを Ingwine イングウィネとして称賛する伝統を受け継ぎ、またそれは、アングロ・サクソン人が、デネと共通の起源に遡るという歴史認識を持っていたということであった。しかしながら、古くからのアングロ・サクソン人のデネに対する尊崇の伝承は、そのまま『ベオウルフ』におけるデネの Ingwine イングウィネとしての称賛に直結するであろうか。つまり結果的にそこに古来の伝承との一致が見出されるとしても、それがアングロ・サクソン人に持続し続けていた伝承の現われであろうか。その間に何らかの断絶が、言葉を換えれば、歴史的事件による状況的变化が介在しているように思われる。またそのことが『ベオウルフ』の成立に、深く関与しているように思われるのである。

4.

前項の最終部分で、アングロ・サクソン人社会にデーン人に対する尊崇の念が受け継がれていたことを確認し、また、それが持続的に受け継がれたもので

94 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

あったか否かについて、問を提示した。その伝承には明らかに断絶が存在している。それは、具体的にはデーン人の侵入によるものであり、デーン人の侵入から始まり、その帰着点としてのデーン・ローの確立によって終止符を打つ時期である。そのデーン・ローの確立以後に『ベオウルフ』が成立したと推測されるのであるが、まさにそのデーン・ローの確立という歴史的事実こそ『ベオウルフ』が成立した契機として捉えられるのではないだろうか。デーン人の侵入は、『アングロ・サクソン年代記』によれば、787年から878年までであるが、その時期は、アングロ・サクソン人とデーン人の対立が最も激しかった時期であり、アングロ・サクソン人の詩人が、デネを舞台とし、デネをいささかなりとも称える物語であるところの『ベオウルフ』を著わしたということは考えられない。デネに対する共通意識の伝承が復活したのは、当然のことながら、デーン人の侵入が終わり、デーン人がアングロ・サクソン人によって、イングランドの中部から北部に、デーン・ローという自治区を与えられた時以降であろう。その時以降、アングロ・サクソン人にとって、イングランドにおけるアングロ・サクソン人とデーン人の融和が、国家の維持にとって最重要事項になり、その結果、かつては存在していたが、百年間ほど失われていたアングル社会におけるデネに対する親近性を持った捉え方が、復活したものである。

そのアングルのデネに対する以前の捉え方の復活が具体的な作品として結実したのが、『ベオウルフ』と言えるのではないであろうか。アングロ・サクソン人とデーン人の共存の重要性を特に強調しようとする『ベオウルフ』の作者の意図は、デーン・ロー地域のデネの存在に起因するものであるように思われる。前述のアルフレッドのオロシウス、エゼルウェルドの『年代記』にも、アングルとデネの居住地域と移動の軌跡が見出された。『ベオウルフ』の成立は、アルフレッドのオロシウスとエゼルウェルドの年代記の間の時期であったと思われるが、すでにアルフレッド大王により、デーン・ローが確立し、アングロ・サクソン人とデーン人の共生が開始していた。

アルフレッド大王によるオロシウスの古期英語訳には、Ohthere オーホトヘレと Wulfstan ウルフスタンという二人の人物による、スカンジナビアおよび北ドイツとその東方の航海譚を通して、当時の北ヨーロッパの Germania

の状況が、詳しく伝えられているが⁽²⁴⁾、興味深いことに、アルフレッド大王は、少し前までイングランドを存亡の危機まで追い込んだデーン人に対して、憎悪や敵愾心を微塵も示していないということである。むしろ、デーン人、そしてその他のスカンジナビアのゲルマン人に対して、共感が示されている。その共感とは、かつて祖先を共有していたという同族意識から生じているものである。デーン人の侵入を抑え、イングランドを統一し、デーン・ローを確立したアルフレッド大王には、すでにそのような、デーン人とアングロ・サクソン人の一体感、同一国民としての共通意識が存在していたのである。

繰り返せば、『ベーオウルフ』には、作者による、アングルとデネの共通意識の強調が感じられ、それがデネに対する称賛となって現われていた。つまり、Ingwine イングウィネの象徴としてのデネという称賛は、アングロ・サクソン社会において、アングルが、まさにイングウィネの象徴的存在であるという認識の、かつてのあり方を垣間見させる作者の意図と言えるのである。

チャドウィックは次のように述べている⁽²⁵⁾。すなわち、歴史時代には、西バルト海のテュートン（ゲルマン）民族は、すべて the Danes デーン人の中に包含されている；『ベーオウルフ』の成立した時代に、Ingwine は用いられなくなりつつあったようであるが『ベーオウルフ』では、Dene と Ingwine は明らかに同義語である；ブリテン島の Angli は自らを the Danes の中には全く含めていなかったように見えるが、それは Dene という名称が、Angli がブリテン島に侵入する以前には集合的名辞としては用いられていなかったという理由によるものであろう；結局、中世の the Danes とは、1 世紀の Ingaevones と同じであると考えても良いであろう、と。

チャドウィックは、デーン人を一般的に考えられている内容よりも、広範な領域を占めていたゲルマン人部族集団と考え、タキトゥスの Ingaevones は、the Danes と同義であるとしている。アングロ・サクソン人とデーン人は、チャドウィックの述べるように、確かにもともと同族であった。しかしながら、『ベーオウルフ』の中で見出される共通項は、その起源的な同族性に起因するものであろうか。むしろその起源的な同族性の伝統が失われたという喪失感があり、それが契機となり、Ingwine という表現が用いられているように思われるのである。『ベーオウルフ』の著者のアングロ・サクソン人は、実際の

デーン・ローに居住するデーン人が、包括的な Ingaevones つまり Ingwine ではないことを知っていた。デーン人がかつての包括的な Ingwine ではないことを知っていたがゆえに、そこに現実のデーン人を仮託したのではあるまいか。

ナイルズは、『アングロ・サクソン年代記』の系図に現われる Scyld シュルドが、『ベオウルフ』の冒頭において、デネの伝説的な国王としてシェーヴィングのシュルドとして現われることで、デネとアングロ・サクソンの王朝が共通であることが示されるとし、そこに『ベオウルフ』の作者の意図があったとする⁽²⁶⁾。その伝説は、とりわけデーン・ロー地区における、アングロ・サクソン人とデーン人の融合、融和を希求したものであるとする。ナイルズの指摘は、明らかに正しいと思われるが、そのシュルドと共に、『ベオウルフ』の作者は、はるか昔の Ingaevones に遡る Ingwine という言辞を用いて、アングロ・サクソン人とデーン人の、北海ゲルマン人としての失われたアイデンティティの同一性を呼び起こそうとしたのである。

『ベオウルフ』(1044行目)で著者がデネの国王フロースガールに対して、「イングウィネの君主」という表現を用いているのは、著者が、デネを、インガエウォネースとしての共通項、共同体意識を強調し、そしてデネこそが、アングロ・サクソンとデネの共同体意識の主体としての民族であるということを表現したかったのであらうと思われる。つまり、イングを中心にしたアングロ・サクソンのインガエウォネースとしての共同体の存立は、アングロ・サクソン人ではなく、ひとえにデネ、つまりデーン人にかかっているというメッセージであらう。それはなぜであらうか。

5.

以上、『ベオウルフ』の Ingwine という表現について、その意味と、その言葉が『ベオウルフ』で用いられている理由を考えて来た。『ベオウルフ』の Ingwine イングウィネとは、タキトゥスの『ゲルマーニア』に登場する Ingaevones インガエウォネースのことで、古くから、ローマ人に知られていた北海ゲルマン人の一大部族集団であった。タキトゥスの『ゲルマーニア』では、インガエウォネースの中に、アングリイー（アングル）は言及されているが、後のデネに相当するゲルマン人部族は言及されていない。しかしながら、

『ベアオウルフ』では、デネこそがインガエウォネースの本流であるように記されている。

それは、後にアングロ・サクソン人と呼ばれるようになったゲルマン人諸部族が、タキトゥスやプリニウス等のローマ人の記録には言及されていなかったとしても、北海そしてバルト海沿岸地域において、後にデーン人と呼ばれるようになったゲルマン人諸部族の存在、そしてその実体を、ブリテン島に移住する以前から知っていたからであろう。

アングル、サクソン、ジュート、そしてフリースランという北海沿岸のゲルマン人諸部族がブリテン島に侵入し、ケルト人を追いやり、定住し、アングロ・サクソン人となって諸王国を建設し、そこがイングランドと呼ばれるようになった後、北海、そしてバルト海沿岸のゲルマン人が、今度はデーン人としてブリテン島に侵入することになり、イングランドを存亡の危機まで追いやった。およそ百年続くデーン人の侵入を抑え、イングランドを統一したアルフレッド大王は、デーン人にデーン・ローという自治区を与え、そしてデーン人とアングロ・サクソン人の融和を目指し、共にイングランド人としての同一性を追求した。

そのアルフレッド大王の精神の延長上に成立したのが『ベアオウルフ』であると言えるであろう。『ベアオウルフ』は、Ingwine イングウィネという表現を通して、アングロ・サクソン人が、デネと共通の価値体系を持っていることを呼び起こし、イングウィネの代表をデネに仮託することにより、それを確認、強調しているからである。なぜ、それほどまでにイングウィネにデネを仮託する必要があったのか、それは、アングロ・サクソン人にとって、イングランドの統合のために、デネとアングロ・サクソンの融和が、極めて重要だったからである。

『ベアオウルフ』(1044行)で、デネの国王フロースガールに対して、「イングウィネの国王」という表現が用いられているのは、著者が、インガエウォネースとしての共通項、共同体意識を強調し、そしてデネこそが、アングロ・サクソンとデネの共同体意識の主体であるということを表現したかったのだであろうと思われる。つまり、それは、共同体国家としてのイングランドの存立は、ひとえにデネ、つまりデーン人にかかっているというメッセージである。

98 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

それゆえ、『ベーオウルフ』においてイングウィネが、アングロ・サクソンとデネの統合の象徴としての意味を付与され、そしてデネこそが、その統合の担い手であるとしたのであろう。

デーン人の侵入でアングロ・サクソン社会の伝統は破壊されかけたが、統一国家に向けて再生する時に、『ベーオウルフ』の著者は、失われたアイデンティティの復活のために、Ingwine イングウィネという表現を用いて、かつてのアングロ・サクソンとデネとの関係を再確認し、イングランドの統一のために、デネこそがイングウィネの代表と記した。その『ベーオウルフ』の著者にあったのは、イングランド統一に対する痛切な危機意識であった。デーン・ローの成立のおよそ二百年後、ノルマン・コンクエストによって中世イングランドに新たに劇的变化が生じたが、今日の英語を形作っている重要な要素の多くが、かつてのデーン・ロー地域の英語から発していることを考えると、『ベーオウルフ』の著者が希求した、イングウィネとしてのアングロ・サクソン人とデーン人の融和は、十二分に達成されたと言えることが出来るであろう。

[注]

- (1) *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, ed. Fr. Klaeber, 3rd ed., D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950.
- (2) Tacitus (Publius Cornelius Tacitus), *Germania. Cornelii Taciti de origine et situ Germanorum*, ed. J. G. C. Anderson, Clarendon Press, Oxford, 1938, I-2.
- (3) *ibid.*, II-30~40.
- (4) Chadwick, H. M., *The Origin of the English Nation*, Cambridge University Press, 1907, pp.222-225, pp.230-233, pp.287-297. 興味深いことに、チャドウィックはIngを個人と考え、『ベーオウルフ』の冒頭に述べられているデネの王朝の創出者、シェーヴィングのシルドと同一人物であるとしている。それについては稿を変えてあらためて論じたい。
- (5) Ptolemaios: Klaudios Ptolemaios, *Claudii Ptolemaei Geographia*, ed. Karl Müller and C. T. Fischer, 2 parts., Paris, 1883-1901, XI-7. 本稿では、プトレマイオスのギリシア語の名称を、便宜のためにラテン語表記に変えている。

- (6) *ibid.*, XI-8.
- (7) 拙稿『アングルの故地とその移動の軌跡について——中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景（4）』、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第4号、2007年。
- (8) Plinius (der Ältere), *Historiae naturalis. Natural History*, ed. and trans. H. Rackham and W. H. S. Jones, Loeb. 10 vols., London and Cambridge, Mass., 1938-56, IV-99. ちなみに大プリニウスは、タキトゥスの Ingaevones を Ingyaeones、また Istaevones を Istriaones と記している。
- (9) Tacitus, *op. cit.*, I -2.
- (10) Cf. Chambers, R. W., *Widsith: A Study in Old English Heroic Legend*, Cambridge University Press, 1912, p.80.
- (11) *King Alfred's Orosius*, ed. Henry Sweet, EETS, No.79, 1883.
- (12) Ethelwerd. *Fabii Ethelwerdi Chronicorum Libri Quatuor*, ed. H. Petri, in *Monumenta Historica Britannica*, London, 1848; William of Malmesbury. *Willelmi Malmesbirensis Monachi De Gestis Regum Anglorum Libri Quinque*, ed. W. Stubbs, the Rolls Series, vol.90, 2vols, London, 1887-1889; *Gesta regum Anglorum*, edited and translated by R. A. B. Mynors, completed by R. M. Thompson and Winterbottom, Clarendon Press, Oxford, 1998.
- (13) *Beowulf*, I. 9, ll. 43-46.
- (14) *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, ed. J. Earle and C. Plummer, 2 vols, Oxford University Press, 1892, 1899; repr. 1972.
- (15) 拙稿「古期英語詩『ベーオウルフ』の成立時期について」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第7号、2010年、を参照。
- (16) Klaeber, *op. cit.*, p.439.
- (17) Chambers, R. W., *Beowulf—an Introduction to the Study of the Poem*, edited and supplemented by C. L. Wrenn, 3rd ed., Cambridge University Press, 1959, p.71.
- (18) Chambers, *ibid.*, pp.68-88; Klaeber, *op. cit.*, pp.121-124; 厨川文夫、『厨川文夫著作集、上』、金星堂、1981年、pp. 460-463。
- (19) Widukind von Corvey, *Drei Bücher sächsischer Geschichte (Widukindi monachi Corbeiensis, Rerum gestarum Saxoniarum, libri III)*, heraus-

- gegeben von P. Hirsch und H. E. Lohmann in *MGH, SS rer. Germ. in usum scholarum*, 5 Aufl. Hannover, 1935, in “Geschichtsschreiber der deutschen Vorzeit”, 2Gesamtausgabe, Bd. 33, 1931; neu bearb. von A. Bauer und R. Rau, Darmstadt, 1977.
- (20) Herrmann, J. (hrsg.), *Die Germanen*, Band I, 5durchgesehene Auflage, 1988.; Band II, 2durchgesehene Auflage, Akademie-Verlag, Berlin, 1986. Leube は Widukind von Corbey の、サクソンとテューリングアンとの関係についての記述が事実と異なる点を指摘している。
- (21) 拙稿「サクソンとザクセン——中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景（3）」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第3号、2006年。
- (22) Saxo Grammaticus, *Gesta Danorum*, ed. by P. E. Müller and J. M. Velschow, Lib iv, Havniæ, 1858.
- (23) Tacitus, *op. cit.*, II -44.
- (24) 拙稿「アルフレッド大王のオロシウスの古期英語訳における Gotland について」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第6号、2009年。
- (25) Chadwick, *op. cit.*, p.296.
- (26) Niles, J. D., *Beowulf—The Poem and Its Tradition*, Harvard University Press, 1983, p.106.

ABSTRACT

Ingwine in *Beowulf*

Michio IWAYA

In *Beowulf*, the oldest epic written in Old English, can be found the expressions of Ingwine several times. They are used to signify the unity between the Danes and the Anglo-Saxons, especially to emphasize the praise on the Danish dynasty. Roman writers such as Tacitus and Plinius had referred to the North Sea Germanic tribes as Ingaevones, presumably named after one of the three sons of the Germanic God. Ingaevones had the meaning of the comrades and followers believing in Ing and included in them were the Angles, the Jutes and the Frisians who later migrated to Britain. But in the Roman works can be found no references to the Danes, so we have no written records about the Danes as Ingaevones.

Ingwine in *Beowulf* apparently has the same meaning as Ingaevones in Roman times, because it is used in the context that the author praises the Danes as the symbolic representative of Ing-peoples including the Angles. But in Roman times, as stated above, we had never found the Danes as Ingaevones. Then why were the Danes referred to as Ingwine in *Beowulf* and why did the author of *Beowulf* praise the Danes so enthusiastically? This paper aims to solve those problems. The historical incidents such as the Danish invasion and the establishment of Danelaw might have some important intermediation in it.